えんぽとたんぽの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第175号	２０１６年2月２３日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：原谷 一誠

１．活動報告（　事務局　記）

―２月７日（日）参加者１４名で、実施した作業内容は、以下の通りです。

①遊歩道の修復：湿地帯の木橋の一部撤去し、U字溝での散策道の修復を行いました。

②湿地の除草：湿地帯に茂っていた雑草を鎌および草刈り機を用いて刈り取りました

③止水池の入水部の通称「夜這い草」の駆除を行いました。

また、作業前に以下の件について協議いたしました。

・水車修復の方策：大幅な修復または新製作の見積もりを取り、資金面の方策を考えることになりました

・観察隊募集の状況：現在入隊数は確定していないが個人的に勧誘するチラシが出来たので二俣瀬小学校他個人的に説明に行く

・会計内容および監査：２月７日までの会計収支を事務局にて把握、更に３月まで支払いは生じる。親子自然観察隊会計についても協議した。３月３０日を会計監査を行う

・胴長の購入他：胴長は各々のサイズが違うので個人に合ったものを購入し、支払は会から提出します。保管も個人で行う事になりました。ゴム手袋は前田事務局にて一括購入します。

―２月２０日（土）降りしきる雨の中、参加者１２名で、現場活動を実施いたしました。

①椎茸の菌打ち：事前に準備されていたホダ木に椎茸菌を打ち込み、設置箇所に運びました。準備作業に参加された会員の皆様、お疲れ様でした。

②ため池の除草：ため池に茂っていたキシュウスズメノヒエを取り除きました。

また、作業前に以下の件について協議いたしました。

・駐車場の整地： 駐車場で目立つようになった水溜りの整地をおこなう
これに用いる土砂の搬入および整地の時期については未定

・観察路の整地：ため池沿い観察路（川側）の整地をおこなう
猪により掘り返されたものであるが、整地の時期は未定

・会計監査：会計監査日時（３月３０日）の確認
観察隊は、監査の必要はないが領収書の漏れがないこと

・うべまるごと元気： 宇部市観光・6次産業推進課が主催する、“うべまるごと元気ネットワーク”への参加は 参加準備を進める。これの担当は、前田会員が務める

助成により支給された草刈り機（共立製）を関根事務局長が持参しました。

２．今後の予定（　事務局　記）

◎見学者

◎行　事

―３月　６日（日）維持活動・エコアップ

―３月１９日（土）維持活動・エコアップ

―３月３０日（水）会計監査　１０時ふれあいセンター―

３．来訪者の声

今月はありません。

４．会員の声　【十尺（としゃく）と老夫婦】　（　原田滿洲夫　記）

今は農業が機械化して非常に便利になったが、楽になった代わりに稲作では生計が全く立てることが出来なくなった。過っての稲作に於いて、手で刈った稲は一旦ハゼをかけで乾燥をし、脱穀する。籾をさらに天気干して臼挽（うすひき）に備える。今は田んぼで熟れた稲をコンバインなる機械で一気に刈り取り・脱穀・わら切りを行い、収穫した生籾を農協のライスセンターなる施設に投げ込むとこれで稲作が完了する。

昭和三十年代までハゼかけ脱穀した後、稲藁（わら）は、春先まで**十尺（としゃく）**を組んで保存していた。つくり方も他の家のものより、よりきれいな形に作ることが競争になっていた。よくできた時は鼻高々である。

十尺（としゃく）の組んである藁束を十何本か抜き出して中で遊んだこともあった。中に入ってそのまま寝込んで気が付いたら夜になっていたこともあったが、子どもの多い時代で親も一人くらい抜けていなくても気が付かないなどと子供にかまっていられなく今ではとても考えられない時代であった。又わらを抜いたため藁が散らばったり、十尺が崩れたりもして親から大目玉を受けたこともたびたびあったことを思い出す。

春までに田んぼの準備でこの藁を「手押し藁切り器」で一尺（三十㎝）位に小さく切り、牛の厩肥と互い違いに重ねて発酵させ元肥として水田の粗お越し前に散布することが毎年の農作業の一環であった

十尺（としゃく）は現代では死語となってきている。幸い今回二俣瀬の田の小野にある「緑豊舎」さんが善和城生原の渡辺会員宅傍の道路わきに二体作っておられて見ることが出来た（写真参照）としゃくは十尺約三mが基準であるが、ここに作ってあるのは七尺か八尺であろうか？昔見慣れた風景を懐かしく思った。

この十尺、過っては農業で主たる生活の収益を得て働き続け、腰も曲がり、背も縮まってしまった老夫婦に見えてしょうがない。そこで一句

“寒風に　耐えて寄り添う　十尺かな”

５．ビオトープ関連：「山口県の昆虫たち」　　（　管　哲郎　記）

（２）サトジガバチ　*Ammophila sabulosa nipponica*

ハチ目　　アナバチ科　ジガバチ亜科

体長：２０～２５㎜

分布：北海道、本州、四国、九州、沖縄

ミツバチほどではないにしろ、畑や道端で比較的目にする黒い長細いハチです。胸と腹の間が細い棒でつながれたような姿をしています。人を刺すことはありませんが、チョウやガの幼虫を餌として狩る“狩バチ”です。草むらの土の間に深さ１０センチほどの穴を掘り、その中に狩ってきた幼虫を蓄え、子供のエサにします。サトジガバチは巣穴１か所につき１頭の子供を育てます。

写真のように、強力なアゴと力を使い自分より大きな獲物を狩り、巣の中に運び込みます。巣の中には１頭の幼虫が成長するのに十分なエサ（数頭のイモムシ）を蓄えます、巣穴は外敵に襲われないようにもとのように石や泥をつめ蓋をします。

自分より大きな獲物はやはり運ぶのが大変ですので、イモムシの腹側にある神経節に針を刺し、運動神経を麻痺させます。殺してしまうと子供が大きくなるまでにエサが腐ってダメになりますので、イモムシを殺さず動けなくして子供の食糧を確保するという、実に見事な生態をしています。

また、サトジガバチはイモムシを見つけるために木の下でイモムシのフンを探します。葉の上に隠れているイモムシを探すより大変効率が良いわけで、これも職人技ですね。

自分より大きなシャクトリムシを運ぶサトジガバチ、体がマヒしてまっすぐな棒状になっている

アオムシを運ぶサトジガバチ　体がマヒして全く動けない

【参考文献】田中義弘、2012．狩蜂生態図鑑．192pp．（株）全国農村教育協会．

６．会よりの連絡事項

１．この度椎茸の原木、ホダ木に椎茸菌を打ち込みをして保存（椎茸菌が正常にホダ木蔓延さすための養生）が済みました。６月頃には本保存する為並び替えを行い更に１年間くらい待つことになります。原木の切り出し・ホダ木の切込み・菌打ち・養生等々の作業に携わって下さった会員の方々にお礼を申し上げ収穫を待ちたいと思います。

２、主に猪に堀起こされ溜池ゾーンや止水池の散策道が荒れてきました。春からは草刈りに活動が集中することになりますが、創設以来１５年が過ぎ大々的な修復が我々会員の力では追いつかない状況になってきました。行政の力や外部業者のお力添えも考えて計画して永久保存していく使命があります。

７．編集後記

先日久しぶりに活動に参加できました。まだ２月寒い。当日は湿地帯の橋の修復作業、コンクリートのU字溝を並べ橋にします、水の中も当然冷たいです、しかし皆さん元気？に頑張ってます。U字溝重いです、いつの間にか汗が出て来てます、作業もなんとか終了、空を見ると真っ青な空が広がってます。ビオトープから見る空は気持ち良いものですね。

（　若林　正治　記　）